

中亞探檢

一 緒 言

書物の傳ふるところによつて、個々の遺物の示すところに従つて、吾々が推知し得る遠き過去の文明は、假令それが如實に考へ得られたにしても、ほんの皮相的の、若しくは斷片的のものに過ぎないことが少くない。人間各種の知識技藝の發達の跡を究め、之を綜合し統一して能く昔の文明の状態を看取し得たとするものがあつても、果してそれが其の目的に對して十分の廣さと深さとを有するものであるかは、多くの場合に於て疑問である。ヴェスビオの麓、堅き溶岩の下に藏されたポムペイの町が、千數百年の昔の有様をさながらに吾々の前に展開した時に、數多き書物によつて當時の状態を究め得た積りであつた人々が、今更に其の知り得し所の少かつたことを發見して、如何に驚異の眼を見張つて此の文明の再現に接したかは、多くの研究者の告白する所によつて明かである。況んや書物の記する所極めて少く、遺物の徴すべきもの殆んど存せざる地方に關して、吾々の試み得る推斷の程度の深さも廣さも、極めて貧弱のものであるべきはいふを俟たぬ。しかし貧弱と自覺する時に、人の尊き知識慾は常に之を究明せんとする努力となつて現はれ、漸次開拓の境を擴げて行く。殊にその貧弱な點が吾々の知らねばならぬ重要な事實の上に存することの明かになつた場合には、驚くべき努力によつて莫大な結果の得らるることが少くない。